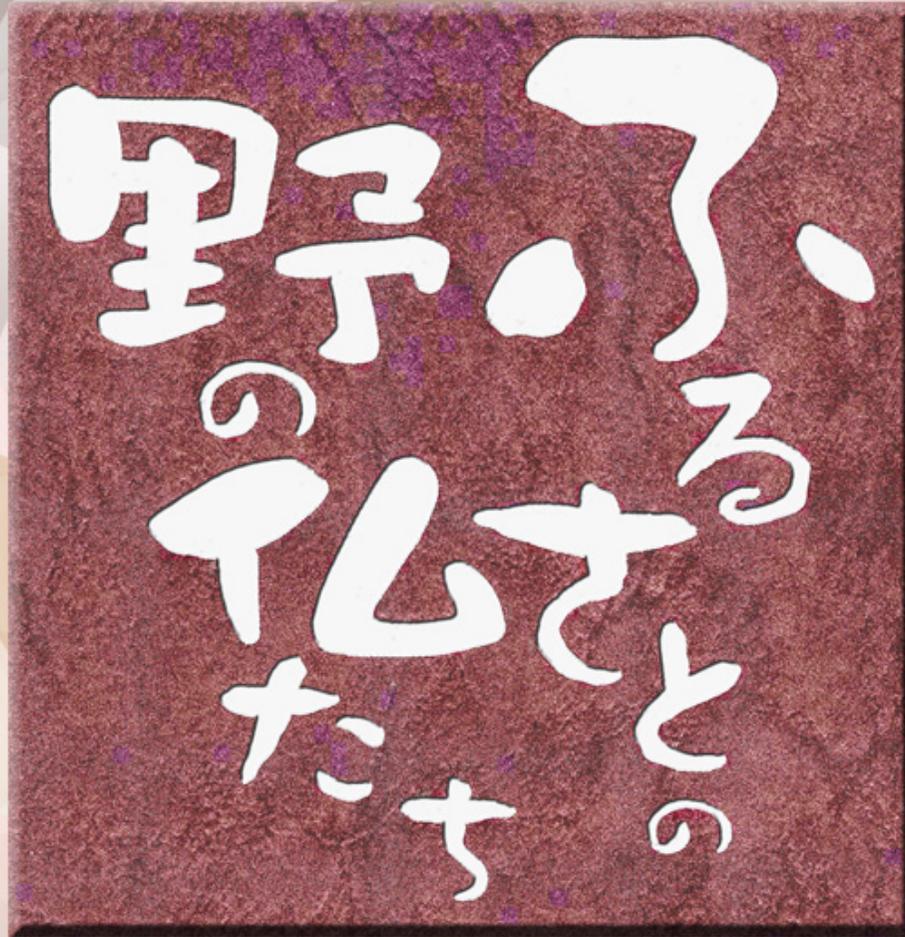


渡辺克己著



第三回

- 8 地藏菩薩 (上)
- 9 地藏菩薩 (中)
- 10 地藏菩薩 (下)

8 地藏菩薩 (上)

閻魔さまは地藏さま

地藏菩薩は庶民信仰の花形です。

人間の心に、恐怖や危険、悲しみや不安を与える場所、あるいは哀別離苦に号泣する人間の弱さが、かげろうのように漂っている場所には、きっと地藏菩薩が立ってござって、慰めてくれる、最も人間とのつきあいの深い仏さまです。

そういう菩薩ですから、地方的な匂いの強い磨崖仏などには、さぞたくさん刻まれてあるだろうと思われそうですが、意外にも、磨崖仏には地藏さまの刻まれている数は少ないのです。

わが国に地藏信仰が渡来したのは、天平時代といわれ、平安時代には、多くの造像が行なわれております。そして、末法思



白杵堂ヶ迫磨崖仏、十王像と地藏菩薩(中央)

想の浸透とともに、無仏時代には、仏陀に代わって地蔵が、人間を苦界から救うという信仰を強めます。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道を巡錫して、衆生をことごとく抜苦救済する、六道能化の地蔵信仰から生じた、六地蔵の造像などは「今昔物語」などにも語られています。

しかし、地蔵信仰がほんとうに大衆に浸透していったのは、中世も後半になってからです。

かねてから私は、磨崖仏の造頭は庶民の信仰によったものではなく、地方の権力者あるいは強大な財力と密教僧や修験者との結びつきによったもの、あるいは修験者自らの発願で造仏即行法の思想から刻んだものが大半を占めていると考えています。

特に王朝時代から鎌倉時代にかけての造頭は、それがほとんどだと思えます。そして密教修験者の奉持する仏は、大日如来を中心とする仏たち、そして特に不動明王の信奉が強く、浄土思想による地蔵とは、縁がうすかったことが、磨崖仏に地蔵の造頭が少ない理由だと思われます。

しかし、優秀な磨崖仏に、地蔵像がないわけではありません。中でも最もりっぱな造像は、白杵石仏群中の、堂ヶ迫石仏の中にあつて、参拝者に強い印象を与えている地蔵十王像です。参拝の順路からいえば、第一群のホキ石仏から石段をのぼって、堂ヶ迫石仏群に移る取っ付きの岩壁の、岩を大きく彫りくぼめた龕の中がそれです。

中央に地蔵坐像、その左右の上段に各二軀、下段に各三軀の計十軀の十王を厳然と列べて彫り出してあります。

地蔵菩薩は、右手を胸に立てて施無畏印（せむいゐん）、左手は膝前で宝珠を掌上に持し、半跏倚坐（はんかきざ）の姿勢です。

私たちが、普通にみる地蔵さまは、右手に錫杖（しゃくじょう）を持った姿ですが、あれはほとんど鎌倉時代以後に造りだされた像です。

十王は、亡者の生前における行為を残らず裁いて、罪の軽量を定める、冥界の裁判官です。この十王思想は、唐時代末期の中国において成立したもので、極めて道教的なものです。

日本には、平安後期に渡来したもののようですが、地蔵と十王とが結びついたのは、十王と不可分の関係を持つ、十三仏思想からです。十三仏は、死者の法要のさいの、中陰並びに周忌の本尊とされる仏菩薩のことです。

各中陰・忌日に死者を裁く十王は、実は次に記するように、十三仏の各仏菩薩が本地仏です。

すなわち次のように各仏菩薩が姿をかえて現われているとされています。

- （初七日） 秦広王―不動明王。
- （二七日） 初江王―釈迦如来。
- （三七日） 宋帝王―文殊菩薩。
- （四七日） 五官王―普賢菩薩。
- （五七日） 閻魔王―地蔵菩薩。
- （六七日） 変成王―弥勒菩薩。
- （七七日） 太山王―薬師如来。

(百力日) 平等王—観音菩薩。

(一周忌) 都市王—執至菩薩。

(三周忌) 五道転輪王—弥陀如来。(以後の忌日は略す。)

右にみるように、ちょうどまん中の五七日に死者を裁くのが閻魔王です。閻魔王さまは十王の首領であり、冥府の支配者なのです。その閻魔王さまの本地仏が地蔵菩薩ですから、これ以上説明の要はないでしょう。

九世紀に書かれた「日本霊異記」に、次のような話が記されています。

称徳天皇の、神護景雲二年に、一度死んだ藤原広足という人が蘇生して、閻魔王に会った話をした。彼は、冥府に到って「我をここに召したるは誰人なるや」と尋ねた。するとこれに応えて「我は閻魔王。汝の国において地蔵菩薩と称するなり」といった、というのです。

「地蔵十輪経」にも「地蔵菩薩或作閻羅(魔)王身」と説かれています。

白杵堂ヶ迫の地蔵菩薩が、冥府の裁判官である十王の中心に、大きく置かれている理由が、これでお判りになったと思います。白杵石仏を刻ませたと思われる強大な財力を持った施主が、冥府での救済を願って、特に地蔵十王を彫ることを命じたであろう気持ちを、察することができます。

昔の人が、死後の恐怖におののき、極楽往生を求める、ひたすらな思いには、現代のわれわれには想像もできないほど、切なるものがあつたことでしょう。

堂ヶ迫の十王は、道服に笏（しゃく）を持って、巖然と倚坐（きざ）してありますが、その表情には、後世の地獄図や彫刻にみる十王のように、恐ろしい怒りの表情はなく、むしろ冷然として正面に目をすえています。このような表情の扱いも古形式です。大分県内には、室町時代以後に刻まれたとみられる十王の石彫像が、いくつもあります。その十王は、一人一人が強烈な個性をもって、みる者に恐怖心をおこさせます。たとえば、杵築市の轟地蔵群のかたわらに据えてある十王もその一例です。

耐える女の艶歌（うた）もある 辻の地蔵さま

地蔵さま はい淋しいのです 私も

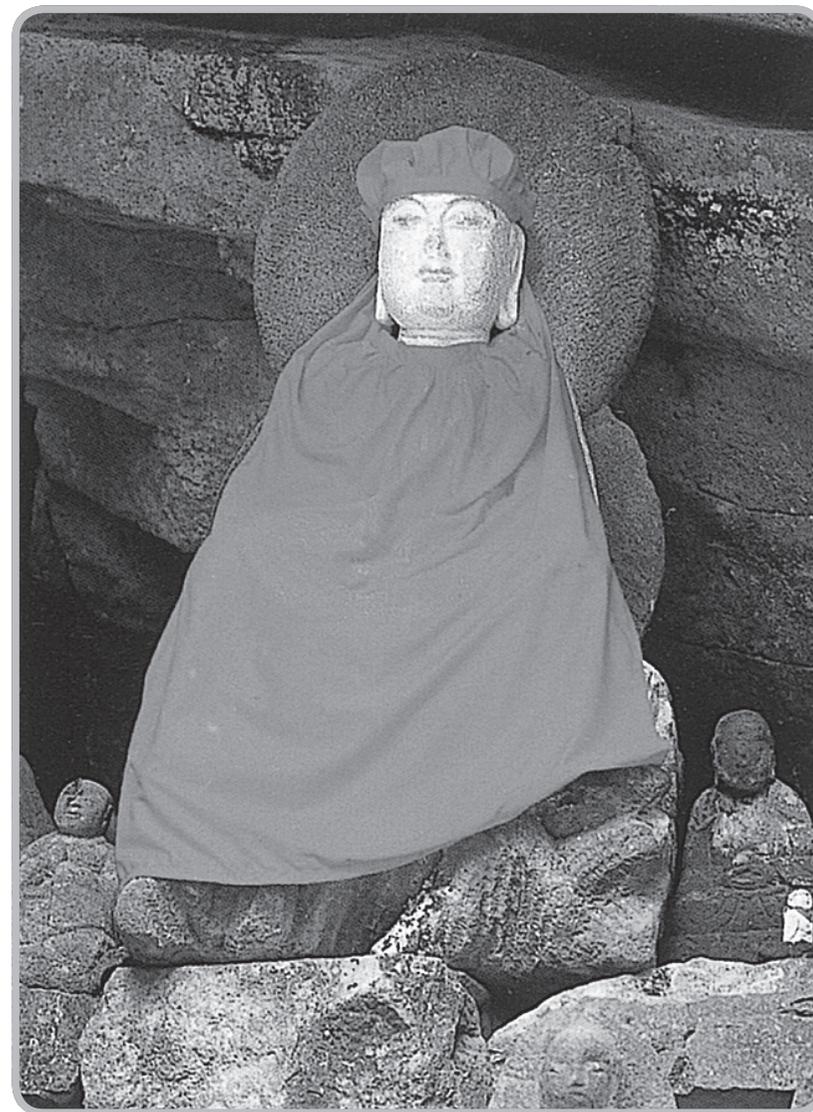
花が散り 風が鳴り たった一人野仏と

9 地蔵菩薩（中）

お化粧地蔵と童子地蔵

杵築市北杵築の荒平にある「とどろき（轟）の湊」にまつる「化粧地蔵」と、それを取りまく数十体の小さなさまざまの地蔵像は、訪れる人々の心を洗い浄めずにおきません。

伝説によると、元中二年（一三八五）に、木付城主四代頼直の息女豊姫が、安岐城主田原頼泰との婚約が破談となったのを悲しみ、とどろきの湊に身を投げた。姫の死を哀れんだ頼直は、一つの石で二つの地蔵像を刻ませ、一体を城（当時竹ノ尾にあった）の近くの洞窟に、他の一体を、とどろきの湊に安置して冥福を祈ったと伝えています。（とどろきの湊は、現在は上方に



轟地蔵

用水池を造ったため水はかれている)

竹ノ尾城址の地蔵のかたわらには、康応元年（北朝年号一三八九）に造成したとの碑文が刻まれてありますから、右の伝説の年代と符合します。頼直は、これから数年後に、現在の杵築城（台山城勝山城などの名がある）に移ったのです。

先に地蔵信仰が大衆に浸透したのは、中世後半からだと述べましたが、鎌倉時代から室町時代を経て、次第に高まった大衆の地蔵信仰と造像は、江戸時代にはいると大流行します。墓地や路傍の地蔵さんといえば、たいてい江戸時代のものです。しかし江戸末期ごろから次第に衰退して、明治にはいると、ぱったりと絶えているのです。明治新政の“いさみ足”ともいえる排仏棄釈の影響かもしれません。

あの、とどろきの地蔵信仰によって奉納した数十体の小さな地蔵像は、数百年の歳月の間につもりつもったものです。中尊

の化粧地藏への信仰があつて奉納されたものですから、中尊の地藏の歴史を語るものといえましょう。

とどろきの地藏を「化粧地藏」と書きましたが、醜女であつたと伝える豊姫ゆかりの地藏に、白粉で化粧してあげて祈れば、願いがかなえられるそうで、娘たちが、ひそかに地藏の顔に白粉をぬって、胸の思いを訴えるのだというのです。そして思いがかなえられると、お礼に、自ら石を刻み、あるいは石屋に頼んで刻んでもらつた小さな地藏像を奉納するのです。

現在は、地藏像を奉納することは絶えているようですが、切ない思いを抱いて地藏さまにすがらねばおれない女性は、今も変わらずあるもののように、お顔の白いお化粧は、現在も続いています。

それにしても、白いお化粧の地藏さまを取りまいて、岩上、岩下にところせましとおし並んだ小さな地藏群は、訪れる私どもの心をとらえて離しません。



万寿寺の童子地藏

それは、両掌の上に、ちよこんと乗るほどの小さいものから大きいものまで、一つ一つ個性的で素朴なものです。これを、こつそり持ち帰るバチ当たりが、戦後さかんにあったとかで、姿の良いものが少なくなったということなのです。それでも私は、ここを訪れるごとに、素朴で小さな地蔵像のとりこになり、去り難い思いにかられるのです。

化粧地蔵といえば、野津原町太田の磨崖七体地蔵も、その生まなましい彩色からみると、近年まで、地蔵盆ごとに色のぬり替え、すなわちお化粧をしてさしあげていたのかと、私は心引かれるのです。

石の地蔵さまを、地蔵盆ごとに、お化粧のしなおしをする風習は、京都、福井などを中心に近畿一円から、東北、九州まで散在しています。

お化粧をしてあげる主役は、子どもたちです。それは地蔵盆が子供中心の行事だからです。中には、母親など、おとなの女性がお化粧を担当している例もあるようですが、子供たちが、自由奔放に彩色して仕上げた地蔵のお姿は、楽しく美しい。

大分県内には、私の知るかぎりでは、現在地蔵盆の行事は絶えているようですから、子供たちが地蔵さまに化粧する習慣もないようです。もしあれば教えてほしいものです。

子供と地蔵とのつながりは、非常に濃いのです。作家池田弥三郎氏は、その著「化粧地蔵」（淡交社刊）で、「お地蔵さんは子どもの神様」と述べています。学校教育では、宗教的なものは抹殺されていますが、地域での子どもの宗教行事は、遠慮することはありますまい。

神社の護符も奉じていないようなミコシをかつがせて、地域内を巡り、御さい銭まで貰わせる最近の新興団地の「ごどもミコシ」は論外として、「ごどもミコシ」を氏神さまの祭りにかつがせる親たちは、なぜ夏の夕べの、楽しくやさしい夢をさそう地蔵盆行事を、子どもたちのために、復活してやらないのでしょうか。これは指導するはずのお寺さんが、無力化しているせいばかりといえまじょうか。

かつて、子どもの神様の地蔵さまに、親たちが一心におすがりした姿をとどめているのは、死んだ子どもの墓標となっている地蔵像です。

古い寺院の墓地や、昔からの共同墓地に、今はほとんど無縁墓となっている、地蔵と子どもの法名を刻んだ小さな墓標のかずかずに、私はときどき墓地をおとずれてお会いするのですが、親たちの、なげきをいっばいにたたえた、美しく哀しい墓標の地蔵さまは、墓地の整理のために、どんどん数が少なくなっています。

私はこの地蔵の墓標を「ぶんごの童子地蔵」と呼んでいます。これらの童子地蔵の製作年代は、江戸時代の元禄、享保ごろが最も多く、江戸末期には、ぐっと造像が少なくなつて、明治年代をもつて最後となっています。

墓地に童子地蔵をたずねることをおすすめします。

泣いた女の幻が 化粧地蔵の 白い頬
業がたぎります お地蔵さま お手を

10 地藏菩薩 (下)

六地藏への深い信仰

童子地藏のことを、もう少し述べたいと思います。

昭和三十年代のことですが、山陰地方を旅行したさい、鳥取市内の老医師吉田璋也さんという方が、同地方の古い墓地から、子どもの墓標の地藏像を集めて、地藏堂を建立し「いなばの童子地藏堂」と名付けていることを知りました。

私は、吉田さんを訪ねてお話を聞き、地藏堂を拝観しました。

地藏堂は簡素なものでしたが、ほとんどが無縁仏となつてい
る江戸時代の墓標の地藏像はやがてうち捨てられ、土に帰つて
しまうものです。それを惜しんで、一カ所に集めて保存される
だけでも奇特なことです。しかもその地藏像のなんとという素朴
な美しさにみちていることでしょう。私はひどく心をうたれま
した。

大分に帰ってから、そのことが忘れられず、ひよつとしたら
大分地方にもあるかもしれないと考え、上野の共同墓地のそば
を通ったさい、墓地内にはいつてみました。

そこでみつけたのです。墓地の境界の石垣のそばに、廃棄し
た墓石がよせてあり、その中に二基の小さな地藏の墓標があつ
たのです。

一基は、着色のあとに残り、雨のあとだったので、唇の紅色
が鮮かに浮き出っていて、私に語りかけてくるようで「ああ、お
会いできましたねえ」と、思わず声に出していったほどでした。
それは捜し求めていた恋人に会ったような喜びでした。

その後、市内の古寺の墓地や、古い共同墓地を、しらみつぶ

しに巡って、多くの童子、童女の地蔵にお会いし「ぶんごの童子地蔵」と名付けて写真に撮りました。いずれも、元禄時代前後から安政、萬延ごろ、すなわち江戸時代末期までの作です。地蔵のお顔は、死んだ幼い子を思う両親の涙に洗われ、遂には、死んだ幼い子の顔だちに似てきて両親を慰めたのでは…と思われるほど、幼い無心のお顔だちをしているのでした。

昔は戒名をつけるお寺のお坊さんに、詩情豊かな方が多かったのか、地蔵像の横に刻んだ死児の戒名もすばらしい。秋吟童子、幻霊童子、妙眼童女、梅顔童女、自然児童女などと呼ばれた幼児は、どんな愛らしい子だったのだろうか、死児の姿を想像させられます。

そういえば豊後に配流の身となった越前の大守松平忠直の、幼い娘が、配流の地萩原で死亡し、その墓が、西大分の浄土寺にあります。法名は幻華童女です。忘れられない美しい法名です。

雑草に半ば埋もれて、行く雲の影をうつしている童子地蔵に合掌していると「…二つや三つ四つ五つ、十にも足らぬみどり子が、西院（さい）の河原に集まりて、父上恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は、此の世の声とはこと変わり、悲しさ骨身を通すなり…」の、地蔵和讃が、耳底に聞こえるようです。

完全に都市化した市街地では、もう見ることはできなくなりましたが、郊外の古い集落内を歩いていると、寺院や辻などに燈籠様式の六地蔵石幢が立っています。石幢に六地蔵を刻むようになったのは中世以降、特に江戸時代には集中的に多くなっています。

六地藏石幢には、六体の地藏像を刻んであるのが普通ですが、ときおり六地藏と並んで、別の像が加わっているのを見かけます。これはたいいてい地獄の支配者閻魔さまです。

閻魔さまは、地藏さまと同体であることは前に述べました。その信仰から、六地藏石幢に閻魔を加えるようになったもので、死後の冥福を祈念する民衆の声がかもっているのです。

中には、閻魔と共に、不動明王像または阿弥陀像を加えたものもありますが、これは稀にしかありません。

六地藏信仰は、前にも述べたように、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を巡って衆生を救うとの信仰から出たもので、この信仰はたいへん深く、六地藏像建立は行きわたっています。

六地藏石幢で、県指定有形文化財になっているのは、県内各地十数基にのぼっており、いずれもそれぞれ特徴がある秀れた石幢です。特に私の印象に残っているのは、湯布院町、仏光寺境内のもので、「夫六地藏者六道能化之主濟渡苦海之願主也云々」の願文と、大永甲申（一五二四）造立の銘も刻まれており、六地藏のお姿は半肉彫りの品格のあるものです。

磨崖仏で、地藏像を刻んだのは、臼杵石仏中の地藏十王を先に紹介しましたが、国東半島には、真玉町黒土の福真、堂ノ迫両磨崖仏の六地藏と、田染元宮磨崖仏の不動・天部像の横に、後に刻み足したものと見られる地藏一尊などがあります。

福真磨崖仏のは、大日如来を中心とした曼荼羅を描きだしたように、六観音、金剛界四仏の各坐像と共に、六地藏坐像が彫り出され、両脇を不動尊と多聞天が守護する、壁面いっぱい

構図です。

石造の覆屋に囲まれている、薄暗い壁面の前に立つと、呪縛にかかるような戦慄に似たものが身内を走ります。修験道の、身心を切り刻むぎりぎりの求道の果てに刻み出したものにちがいありません。だからここには、六地藏幢などにみられるような、庶民のおおらかな地藏讃慕の心は感じられません。

地藏さまほど、庶民の中に溶け込んでいる菩薩は、ほかにありません。それだけに、地藏の巡礼を始めたら限りがありません。

童子地藏さま唇に紅さし 夕焼けまつかつか

地藏美男におわします 草もみじの中

野ぼとけと私と 松ぼっくりころころ

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN (なんなん)」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ふるさとの野の仏たち」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック!!!

大分合同新聞社



別府大学

デジタル版「ふるさとの野の仏たち」 第三回

2008年12月26日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2001年11月15日発行／発行：大分合同新聞社
／編集・発売：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 渡辺 克己

◇著者略歴◇渡辺克己
大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十三年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。